

別記様式2

## 開発調査推進会議報告書

会議責任者	開発調査センター所長
-------	------------

- 1 開催日時及び場所 日時 平成27年3月19日(木) 13:30~17:30  
場所 日本丸訓練センター第3教室
- 2 出席者所属機関及び人数 21機関 38名

### 3 結果の概要

議 題	結果の概要
1. 開会	開発調査専門役が開会を宣言した。
2. 挨拶	理事長から主催者挨拶、水産庁増殖推進部長より来賓挨拶が行われた。
3. 資料確認	
4. 委員紹介	開発調査専門役から委員の紹介を行った。
5. 座長選出	規程により理事長が、座長として評価・開発調査担当理事を指名した。
6. 議事	
1) 開発調査推進会議の役割について	開発調査推進会議の役割と今後の開催時期等について開発調査センター所長より説明した。
2) 開発調査等の26年度の実施状況と27年度計画について	各グループ毎に開発調査等の26年度の実施状況と27年度計画について報告し、それに基づいて協議した。
(1) 底魚・頭足類開発調査グループの開発調査について	底魚・頭足類開発調査グループリーダーから、さんま棒受網、いか釣、沖合底びき網各事業について報告した。 出席委員等からの主な意見は以下のとおり。 ・サンマの課題について、現状の漁獲物も鮮魚流通しているものは一部であり、凍結加工向けに回るものの方が多い。次年度の調査計画の中に凍結魚の課題を入れたことは大きな意味があると思う。漁場が遠い中、生産性を上げることは重要な課題である。最終的な出口は、漁船の構造が変わっていくことになると考える。 ・LED集魚灯の船上配置の結果は大変参考になるので、配置などについてご助言をいただきたい。 ・沖底の省人省力化の取り組みは、140-160トンクラスにとって喫緊の課題である。沖底の乗組員は高齢化と同時に年齢分布が二極化しており、40-50歳の層が少ないのが現状である。省力化技術が実現すれば、新米乗組員でも揚網が楽

議 題	結果の概要
<p>(2) 浮魚類開発調査グループの開発調査について</p>	<p>に行えると予想する。また、年配者にも労働環境向上として役に立つと思う。</p> <p>以上の意見等を加味して次年度調査を実施することとした。</p> <p>浮魚類開発調査ブルーリーダーから、遠洋まぐろはえなわ、遠洋かつお釣、海外まき網、大中型まき網各事業について報告した。</p> <p>出席委員等からの主な意見は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・脂肪データを開示した漁獲物でも市場での評価に差がない結果になったが、データは別の使い方ができないかと考えているので、漁場別脂肪データが示されれば役に立つ。</li> <li>・海まき事業で取り組んだ網の目合試験の結果は、世界的に見てもユニーク。開発センターでしか出来ない素晴らしい結果であり、世界的にアピールすべきだと思う。メバチの胴周を考慮すると良い結果が出ると思う。ぜひ進めていただきたいと考える。</li> <li>・大中まきの網なりシミュレーションが一步進んだ形で示された。この技術は最終的には、漁船と網の動きをリアルタイムで把握すること、もう一つは漁船と魚群の動きを集約して、新たな漁獲システムの構築ということになるかと思う。その手前で、漁獲の過程を正確に把握していく取組を行っている点をあらためて認識することができた。これは開発センターでなければ出来ない仕事なので十分にデータを蓄積していただきたい。</li> </ul> <p>以上の意見等を加味して次年度調査を実施することとした。</p>
<p>(3) 資源管理開発調査グループの開発調査について</p>	<p>資源管理開発調査ブルーリーダーから、沿岸課題、近海かつお釣、太平洋クロマグロ種苗ひきなわ各事業について報告した。</p> <p>出席委員等からの主な意見は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ある地域では、漁業者が減ったことで資源が増えているところがある。魚を獲れる状況にあっても、技術革新がないと後継者の参入がない。沿岸の仕事では、他漁業との関連や、漁業者の数が多いたるところにその技術を持ってくると、漁獲圧が高くなってダメという議論になりがちである。技術革新と漁獲圧コントロールは分けて考える必要があると</li> </ul>

議 題	結果の概要
<p>(4) 受託調査について</p> <p>(5) その他</p> <p>3) その他</p> <p>7. 閉会</p>	<p>と思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>沿岸課題を新規に実施する場合、沿岸資源状態や経済状況についての予測は常に不確実性がつきまとう。どれくらいのリスクがあるか漁業者に対し、しっかり説明することが重要である。また、漁業者から他県船とか大臣許可船に対する不満だけが残らないように、水産庁漁業調整課などともよく話し合いながら事業を進めてもらいたい。</li> </ul> <p>以上の意見等を加味して次年度調査を実施することとした。</p> <p>資源管理開発調査グループサブリーダーから受託調査として開発調査センターが実施した日本海ベニズワイ資源生態調査およびスケトウダラ音響トロール調査の概要について報告した。</p> <p>沿岸域における漁船漁業ビジネスモデル研究会の趣旨およびその活動状況について研究会事務局から報告した。</p> <p>いか釣り漁業漁灯技術研究会の活動について底魚・頭足類開発調査グループサブリーダーから報告した。</p> <p>今後も年度末に開催したい旨、副所長より報告された。</p>